



「具体的」な「医療通訳システム」提言に向けて

今月は、当協会が実施している先導的施策支援事業の助成対象となった地域国際化協会事業のうち、(財)京都市国際交流協会の「医療通訳制度モデル事業」について、協会の役割を考察しながら紹介する。

(財)京都市国際交流協会

はじめに

「医療通訳」は、命にかかわる大切な業務であるとともに、守秘義務、誤訳による医療過誤など繊細さかつ重責を伴う業務である。にもかかわらず、その実像はまだまだ漠然ともかかわらず、その実像はまだまだ漠然としている。まして「医療通訳」の「システム化」は、どこから手をつけていいのかも分からない状況である。

そこで、現在取り組んでいる「医療通訳システムモデル事業」について、現状と協会の役割について報告し、今後の住民施策に反映させていきたいと考えている。

医療現場における通訳の需要

二〇〇二年一〇月、京都府下の医療機関を対象に実施した「京都府下外国人医療実態調査」によつて、病院での外国語での診療の状況が次のように確認できた。

- ① 日本語を母国語としない人の診療は、特定の医療機関に集中している
- ② 約六割の医療機関が、言葉の通じない外国人の診療に苦慮した経験を持っている
- ③ 最も対応に苦慮している言語は、中国語と英語である

④ 診療場面では、「診察時の説明」「病気の説明」「薬の説明」などの対応に苦慮している

一方、日本語を母国語としない患者(以下、患者)の需要については、民間団体の多文化共生センター・きょうと(以下、多文化・きょうと)が「京都市南部中国系コミュニティにおける医療通訳の現状」医療通訳カウント調査の結果から」を実施し、次のように報告している。

- ① 二〇〇二年六〜八月の三カ月間に、のべ三八件の中国語の通訳の需要がある
- ② 依頼患者の約半数は五〇歳以上
- ③ 依頼患者の大半は中国帰国者

折りしも、二〇〇二年度には、京都で活動する民間団体から行政機関に対し、外国籍住民の医療費未払いに関する要望書が提出され、言葉の問題を含め、京都における外国籍住民の医療保障問題がクローズアップされてきた。

そのような状況のもと、二〇〇三年九月から、「医療通訳システムモデル事業」(以下、モデル事業)の取組みを開始した。

事業の実施状況と課題

1. モデル事業の概要

このモデル事業では、医仁会武田総合病院

(以下、武田病院)を拠点とし、通訳者が常駐して患者に対応している。

時期について、二〇〇四年二月までを二期に分け、まずは週二日(水・土の午前九時から午後二時)から始め、各期での振り返りをもとに日数、時間、曜日を調整しながら段階的に実施している。対応言語は中国語のみで、一九の外來診療に対応している。通訳スタッフには、時給八〇〇円と交通費を支払っている。

また、武田病院との協定により、誤訳によつて発生した医療過誤については、病院が加入している「医師賠償責任保険」の対象となる。そのほか、病院にはコーディネーターを派遣し、現場を取り仕切っている。この派遣と医療通訳スタッフの研修は多文化・きょうとが担っている。

2. 稼働状況

予想どおり患者は多く、当事業の利用者数、診療科別受付件数及び通訳内容の状況は図表1・2のとおりである。一日平均利用者は七名を超え、多い日には一五名の通訳依頼が発生している。また通訳内容については、「病状・病気の説明」「検査の説明」が多く、先の病院需要調査と合致していることが確認できた。

図表1：利用者数、診療科別受付件数

	9月分累計		10月分累計	
	システム稼動日数	6日	システム稼動日数	3日
利用者数	利用者数	43人	利用者数	24人
	最少利用者数	3人	最少利用者数	5人
	最多利用者数	15人	最多利用者数	14人
	1日平均利用者数	7.17人	1日平均利用者数	8人
診療科別受付件数	合計受付件数	55件	合計受付件数	33件
	内科	7件	内科	2件
	循環器内科	1件	循環器内科	2件
	神経内科	6件	神経内科	3件
	呼吸器内科	2件	呼吸器内科	0件
	消化器内科	8件	消化器内科	2件
	小児科	0件	小児科	0件
	外科	0件	外科	3件
	脳神経外科	0件	脳神経外科	0件
	整形外科	6件	整形外科	4件
	泌尿器科	6件	泌尿器科	0件
	産婦人科	3件	産婦人科	2件
	皮膚科	1件	皮膚科	6件
	耳鼻咽喉科	5件	耳鼻咽喉科	6件
	眼科	3件	眼科	1件
	形成外科	0件	形成外科	1件
	心臓血管外科	0件	心臓血管外科	0件
	歯科・口腔外科	3件	歯科・口腔外科	0件
	神経筋外来	0件	神経筋外来	0件
糖尿外来	0件	糖尿外来	0件	
その他	4件	その他	1件	

また、医療通訳スタッフが一人の患者に対し通訳業務に従事する時間は、平均一時間、そのうち診療に当たる時間は九・九分という状況であり、待ち時間が非常に長いことが明らかとなった。

3. モデル事業の現時点での課題

九月から始まったモデル事業は、現時点において、1. モデル事業運営面、2. 医療通訳スタッフ養成面、3. 医療通訳全般について次の課題が上がっている。

1. モデル事業の運営面について

課題① 想定していた以上に病院は混雑し、また一人の通訳者が複数の患者を掛け持つため、指示が混乱する

課題② 患者のプライバシーと守秘義務を再度徹底

課題③ 患者からの不満・要求への対応

課題④ 病院内での周知徹底の不足

2. 通訳スタッフの養成について

課題① 通訳スタッフの継続した研修機会の必要性

課題② インフォームドコンセント場面での通訳のかわり方

3. 通訳全般について

課題① SARSなど新たな問題への対処を含め、医療通訳スタッフの身分保障

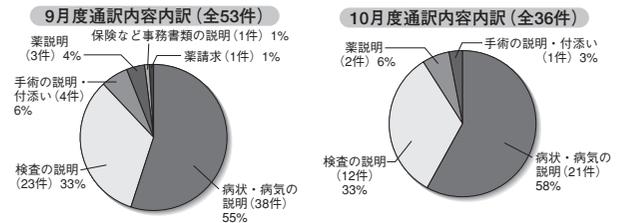
課題② 患者から求められる医療通訳とシステムで対応できる医療通訳の擦り合わせ

課題③ 当事業を安定的に実施していくための経費と業務の分担

「具体的」な「医療通訳システム」提言に向けて

当事業は武田病院と多文化・きょうととの

図表2：9・10月通訳内容内訳



協働事業である。現在、ほかの病院からも医療通訳の依頼が寄せられている。今後これらの需要に対応していくためには、一部の関係者のみならず、市内病院や医師会など医療機関と行政の両者による、医療通訳の公益性と費用負担、そして今後の継続性に向けた話し合いが必要である。そしてその話し合いを重ねることで、ようやく「ことば」の障壁のない医療保障体制作りにつなぐ。

では、そのために協会はどのような役割ができるか。それは、当事業を通して、「医療通訳システム」実現に向け、「具体的」な数値や報告を出す、つまりどのくらいの需要があり、それに対しどのような対応ができるのか。経費と手間はどのくらいか、などを明らかにしていくことであると思う。

それにより、「医療通訳システム」案が具体化し、日本語を母国語とする人々と同じように対処できる状況に、一歩近づくのではないだろうか。全患者数に比べ日本語を母国語としない患者は少なく、数的に、あるいは効率性の観点から無視される存在になりがちである。しかし、今後医療機関と行政との話し合いの場において「具体的」提案をすることによって、国際化への礎石作りを担っていくのではないだろうか。

当協会では来年度もモデル事業を引き続き実施していく予定である。通訳養成のための研修など、市内関係団体だけでなく、他の自治体の協会とも協力関係を築くことができればと思う。